

# 空高く舞いあがる 紙飛行機に夢中!

——自分で作り出し、自分で飛ばす喜び

シニアライフアドバイザー 松本すみこ

## 再就職は早めに切り上げて

冬にしては暖かな日差しの中の土曜日午前、水元公園を訪ねた。紙飛行機がいくつも空に舞っているから、場所はすぐに分かる。4種類2時間ほどの競技会が終わった後、会長の永井義章さん（70歳）、山田和俊さん（69歳）、富山雅之さん（59歳）に紙飛行機の魅力を伺った。



みずもと紙飛行機クラブの山田さん、永井さん、富山さん（左から）

最初に紙飛行機を飛ばして遊んでいたのは山田さんだ。現役時代は建築設計士として活躍し、恵まれた仕事人生だった。その後、再雇用で64歳まで働いたが、だんだんつまらなくなってきた。贅沢をしなれば食うに困るわけではない、紙飛行機や野鳥の写真撮影などの趣味もあると、辞めることにした。紙飛行機はもともと息子の趣味。息子が紙飛行機の全国大会決勝戦に出られることになり、付き添って会場の大阪万博公園に出かけた。そこで小さな機体が空高く上がるのを見て感動し、自分も始めた。全国大会に出るには組織や代表が必要ということ、同じマンションの仲間を集めてクラブも作った。しかし、子供がやらなくなると、親も多忙を理由に來なくなる。結局、山田さんだけが残って、水元公園で飛ばし続けていた。紙飛行機歴は20年になる。

永井さんは複写機のメーカーで保守サービスを担当していた。海

東京都葛飾区には96万㎡もの広さと水郷の景観をもつ水元公園がある。その中央広場で、紙飛行機を飛ばして歓声をあげる中高年グループが「みずもと紙飛行機クラブ」。メンバーのひとりが趣味として楽しんでいたところ、それを見た通りがかりの人たちが参加するように、自然に現在の活動と交流に発展した。

外駐在の語学力を買われ、社内教育や輸出機械の部署で活躍した。日本語のマニュアルを作成し、英語に翻訳して、アメリカに持っていったこともある。50歳を過ぎてからは、企業にコピーセンターのアウトソーシングを勧める仕事を手がけた。

定年後は再雇用を選んだものの、山田さん同様、面白くなくなり、62歳で辞めた。「結局、お手伝いのような立場になり、やりがいがないんです」。

語学力を生かして日本語教師を目指したこともあったが、7年前のある日、水元公園を散歩していた、紙飛行機を飛ばしている人たちに出会った。そして、その場で「教えてくれませんか」と言っ、仲間入りした。今は紙飛行機に没頭する毎日。実は、若いころからパイロットになりたいと思っていたほど飛行機が好きだったのだ。去年、山田さんから会長を引き継いだ。

## 来るものは拒まず、 去るものは追わず

山田さんは「特に勧誘はしていない。公園で飛ばしていて、関心のある人を引っ張りこむスタイル」と話す。永井さんもそうだったが、富山さんもそうして参加した。

富山さんはまだ現役で、金融関係に勤務している。子どもが小さいころ、外で遊ばせようと思っ紙飛行機を始めたが、子どもはすぐに飽きてしまい、やはりお父さんが残った。しかし、当時住んでいた香川では仲間が見つからず、



情報交換はもちろん紙飛行機のこと